

秩父・まちなか有形文化財めぐり

2007年1月30日 底冷えのする秩父往還 晴れ
秩父地場産センター前 午後13時 現地集合
案内していただいた方 新井靖夫先生 ガイド時間 13時~15時30分

午後1時に地場産センター前を出発。最初に武甲酒造柳田総本店に向かう。地場産センター(秩父駅)正面の通りを約150m公園橋方面に歩くと市街中心を南北に通っている国道299号と交差する秩父駅入口交差点がある。この交差点から熊谷方面(北方向)に100m歩くと武甲酒造柳田総本店がある。この建物は木造2階建て切妻造りで、2階は横長の間口部分に繊細な格子戸を立て込み、1階正面には開放的な構えで建物自体は江戸時代後期の造りを残しており、軒先には酒づくりに使う桶を削る全長3~4メートルの巨大なカンナが吊るされている。伝統的な造り酒屋の趣を醸し出す佇まいである。



武甲酒造



巨大カンナ

武甲酒造柳田総本店を後にして、大通りを南方向に約400m歩くと秩父神社から来る道と交差する。この本町交差点の角に旧柿原商店(現在ふるさと館)がある。

木造2階建、寄棟造、正面東側(通り側)には下屋庇(げやひさし)を付け、開放部には繊細な



旧柿原商店

格子戸を入れ、材を多用した丁寧な造りで、敷地内には3棟の蔵がある。特に江戸時代後半、明治、大正、昭和、と地場産業として盛んであった秩父銘仙。柿原商店は大正時代にこの地で繁栄を極めた銘仙問屋であった。

昭和初頭の商家建築の代表建物で国の登録有形文化財になっている。元柿原商店のふるさと館に到着するが、ガイドの新井先生はおもむろに裏手に回り、まずは塀の説明をした。

塀の解説 市街地の角地秩父銘仙問屋として構え、敷地北側の石塀で、凝灰岩系の切石布積みという技法で積まれ、総延長 30mの規模で傾斜を基礎の玉石積で処理している。

この石塀は建物と同じくらい価値があるとのこと。また、蔵は土蔵造り 2階建て切妻造・棧瓦葺で1階の戸口や各階の窓の観音扉、壁板は下見板張り、基礎の玉石積など丁寧な造りだと説明されマニアック。



下見板張り

隣の元新井商店、びいどろ美術館もよく見ると所々に面白い意匠が施されており、屋根瓦の一部が一枚板の石で鱗の形で作られている。建物は切妻寄棟造、2階建てで旧柿原商店と並んで旧秩父往還に東に向いて建ち正面両端に袖卯建をあげ、2階窓に繊細な格子を入れた。明治中期商家の佇まいをよく伝え、柿原商店、新井商店ともに秩父銘仙の問屋として繁栄していた当時の粋な余裕が感じられる。



一枚板の屋根瓦

続いて、「買継通り」へ。大正時代から昭和初期に秩父銘仙の取引で賑わった当時、秩父地域の織物工場が製品取引をする為に出張所が立ち並んでいた。木造2階建、2戸1棟形式で外観は基本的に中央で左右対称になっている。また、2戸1棟形式の2階に通路を作り、隣の建物と繋いで外に出ずに製品取引ができるようになっていた。

「買継通り」から「黒門通り」へ。「黒門通り」とは、昔秩父神社の西側入り口に黒い門があったことからそう呼ばれている。現在、も門は無い。「黒門通り」を南に歩くと十字路があり、その角に番場町公会堂、近藤歯科医院がある。

通路で二階が繋がれている→



近藤歯科医院 昭和2年建造

木造2階建て、通り側の外観はハーフティンバー風の真壁造。黒色でドイツ風に仕上げ、内部は医院棟を洋風に住居棟は純和風。和洋の特徴を兼備した個人医院である。(右写真)



近藤歯科医院の南表側、番場町から東町への道すがら秩父夜祭でもおなじみの諏訪神社脇の駐車場へ。

ここは元柿原商店、店主家宅跡とのことで、当時を偲ばせる建築物として祠の後ろのレンガ塀が残っている。(写真左上、少々写真がわかりにくいでしょうか。)

歩いて東町2区南側、柳町通りを抜けるとNTT社屋前的大通り、「聖人横丁通り」に健生堂医院の旧医院棟があった。

健生堂医院 昭和2年建造

木造2階建て、通り側の外観はハーフティンバー風の真壁造。白色でドイツ風に仕上げ、内部は医院棟を洋風に、住居棟は純和風。

近藤歯科医院と旧健生堂医院は建築年代が同じで外観が黒白一対になっている。

旧健生堂医院、現在は道路拡張のため取り壊されてしまった。非常に残念。



「聖人横丁」の由来は

以前、この横丁に住まわれていた初代秩父郵便局長さんが大変立派な方で人々の尊敬を集めていたためにこの横丁の名が付いたと言う。

聖人通りから西へ大通りを渡ると矢尾百貨店。ここから上町となる。寛延2年(1749年)創業で、創業時の建物は残っていないが築200年を越える本蔵は夏でも涼しい。

こちらから上町を1丁目から3丁目方面に上っていく。

矢尾百貨店から南方向に1丁目から3丁目方向に歩いて300m、通称「三階松本」は旧秩父往還に東に向いて面し、秩父地域では3階建ての珍しい住宅。松本家は江戸時代に秩父地域周辺の忍藩割役名主であったという旧家のひとつである。3階建ての訳は、養蚕の都合とのこと。(右写真)



「三階松本」から200m北側に戻ると松本教室 昭和4年建造

旧秩父往還に西に向いて面し、2階建て木造建築。秩父近代の商業繁栄を物語る町屋建築のひとつである。こちら市内の旧家。この建物は元々旅館として建てられ、その後、店舗へ。現在は学習塾となっている。

ここから東町を通り市役所のある秩父公園の手前まで。

歴史文化伝承館前の大欅（おおけやき）が見えてくる。この欅を残すために、道路もそらして整備されている。



さて、東町から番場町を通り、秩父神社方面を目指す。途中、秩父鉄道「御花畑駅」へ。

秩父鉄道 御花畑駅 大正6年建造

秩父～影森間の開通に伴い建設された木造平屋建ての駅舎で、キングポストトラスの小屋組みで相変わらず切符も硬券だった。駅もレトロな雰囲気があるが、この年代の駅舎を現在も現役で使用しているのは全国でも珍しいとのこと。日常的な風景なので見過ごしていました。(右写真)



番場通りにて2軒のしゃれた医院を見学。本当に秩父のお医者さんは建物に粋に拘っていたなあ、と思う。まあ、経済的にも余裕があったんだろうけれども。(片山医院と岩田医院。右写真は片山医院)



続いては番場通りの邸宅。宮前邸。宮前家住宅表門 昭和5年建造 秩父神社前 番場通り、敷地西側のほぼ中央に間口2mの小規模な主屋の和風意匠とよく似合う繊細な造形が見られる門。



宮前家住宅 昭和5年建造
建築家・山田醇(やまだじゅん)の設計による木造2階建て、瓦葺きの住宅。外観は建具等を含め洋風を基調とする左右対称の急勾配の屋根で構成するが内部は和風となり、和洋が巧みにまとめられている。



藪田家主宅表門 天保年間建造
秩父神社前番場通り、宮前家住宅の向かい側、敷地東側、1間1戸四脚門形式で、屋根は南北棟の切妻造、棧瓦葺、間口3m、袖塀付で南妻にくぐり戸がある。太い親柱から垂木まで、檜材をふんだんに用いた丁寧なつくり。風格のある屋敷門である。住宅母屋は明治末期に武甲山麓の民家の部材を用いて建設したと伝える。正面に、入母屋造屋根の玄関を突き出す社家らしい雰囲気のある建物だ。



最後に、秩父神社でゴール。
秩父神社社殿

延喜式内社で、武田信玄侵入によって永禄12年(1569年)に焼失したが、今の社殿は徳川家康が関東入国をもって天正20年(1592年)9月に家康が社領57石を寄進して再建された。そこで、社殿、屋根の破風に葵の紋と卍がある。



秩父神社社殿

普段、見慣れているはずの風景がガイドの先生の説明でこれほど違って見えてくるのに驚きを感じた…。